

# Oceanotraces 80年の歩み

藤 永 太一郎\*

本誌前号において、宗林由樹教授が GEOSECS 計画の30年と引続く新しい GEOTRACES 計画のスタートについて紹介と計画参加の勧めを書いている。

かねて Telescopic Science (テレ・サイエンス, 遠隔視野科学 — 4 次元的に遠い事象についての自然科学) の領域における化学 (テレ・ケミストリー) の非力を憂いてきた筆者であるから, この国際的な研究体制に協力する事は真に悦ばしいことと考えている。歴史的に文部省, 文科省の大学制度についての考え方をみても明らかなように, 物理学, 生物学, 地学と異なり, 化学には Microscopic Science 微小視野科学への期待しかないように思われる。つまり宇宙地球海洋また過去現在未来といった視野の化学を学ぶことになっていない。結果として化学者は実験室に閉じこもっていて外に出て観ることは少ない。

海洋化学研究所は今春創立60周年を迎える。創設された石橋雅義先生は半世紀世界に先んじて Oceanotraces 海洋微量分析化学の領域を開拓されたのであるが, 研究所開設までは苦難の道を歩まれている。先ず科学研究費は海洋化学については全く助成されておられず, 多くの理学部教官学生からは理学部らしからぬ応用研究に墮していると批判されていた。分析研究室は海の真実探究に強い意欲をもつ者の集まりであったが, また筆者のように純粋分析化学方法論の開拓に専念して上記のような批判に答えようとする意地の者も少数派として仲よく存在していたのである。

海洋化学研究を評価したのは文教府ではなく学界と一部篤志財界人であった。化学会では分析化学と一部無機化学者が Geotraces を挙って評価し没入した。時あたかも第2次大戦を迎え, 国際的な情報交換が困難となったことも幸いして河川湖沼, 火山, 温泉等が海洋とともに旧帝大理化を中心に分担研究され, 日本化学会の「分析および地球化学討論会」は異常と思われる程盛大活潑であったのである。石橋先生を初め多くの地球化学研究者がそれらの成果によって学士院賞を授けられておられる。余事であるが, 池田重良教授によると純粋分析化学研究での授賞は筆者が始めてである由であるが, この事は反対に文教府におけるテレケミストリー軽視の現れともいえよう。

詳論は他にゆずり, 昭和21年文部省管轄財団法人「海洋化学研究所」が兼松商店の寄附によって分析化学講座に設立され, その成果とも相まって新制大学院に「分析化学海洋化学専攻」が設置されてようやく海洋化学は化学教室における研究教育が公認されたのである。然し, 先年この専攻は分析化学講座と共に廃され, 海洋化学研究所は昨年尾池京大総長の御尽力によって京大化学研究所に移って宗林教授の許でようやく安定した研究教育の発展が期待されるようになった。

半世紀先んじて京都に生れた Oceanotraces が GEOTRACES 計画に協力してどのように貢献し得るか, 研究所設立60周年を祝し, その成果を評価するとともに改めて今後の発展を希うところである。

---

\*京都大学名誉教授, (勲)海洋化学研究所理事